淡水想苑

「経営学特殊講義―会計専門職業人の役割―」（阪本安一先生記念基金講座）について

瓦田沙季
社会科学研究科
会計専門職専攻　教授
（修H10・博H13）

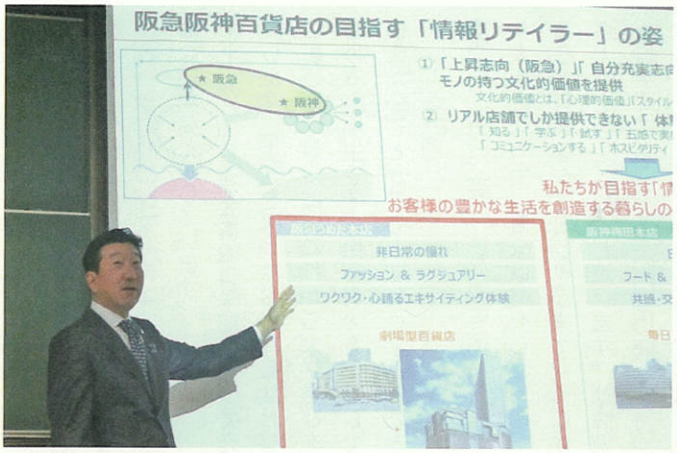
社会科学研究科会計専門職専攻の教員が国際商経学部において担当している講義の1つとして、「経営学特殊講義―会計専門職業人の役割―」があります。この講義は、本学の名誉教授である故阪本安一先生のゼミ同窓生から、阪本先生の神戸商科大学における会計研究の業績をたたえ、その名を後世に残すために、兵庫県立大学に寄せられた寄付金に基づいて創設された「阪本安一先生記念基金」の事業の一環として開講されるものです。

会計専門職は社会的に必要とされる職業であり、目指す価値のある職業であることを理解してもらうことを通じて、受講生が専門職業人としてのキャリアを意識し、学習できるようになることを講義の目標としています。そのために、様々な立場で活躍されている講師をお招きし、会計専門職の魅力を伝え、会計専門職業人になるための道標を示していただくように、15名の講師によるリレー講義となっています。

特筆すべきことは、今年度15名の講師の過半数として、多彩なフィールドで活躍されている本学の卒業生にご登壇いただきました。公認会計士の北山久恵様（G30）、㈱神戸製鋼所代表取締役副社長の勝川四志彦様（G35）、㈱阪急阪神百貨店代表取締役社長の山口俊比古様（G36）、税理士・行政書士の大森達也様（G49、修H14）、キャリアコンサルタントの寺田浩子様（G51）、税理士の山田知佳様（G2015、修2017）、公認会計士の松本瑞季様（G2016、修2018）は、それぞれのご経験を踏まえ、講義されました。

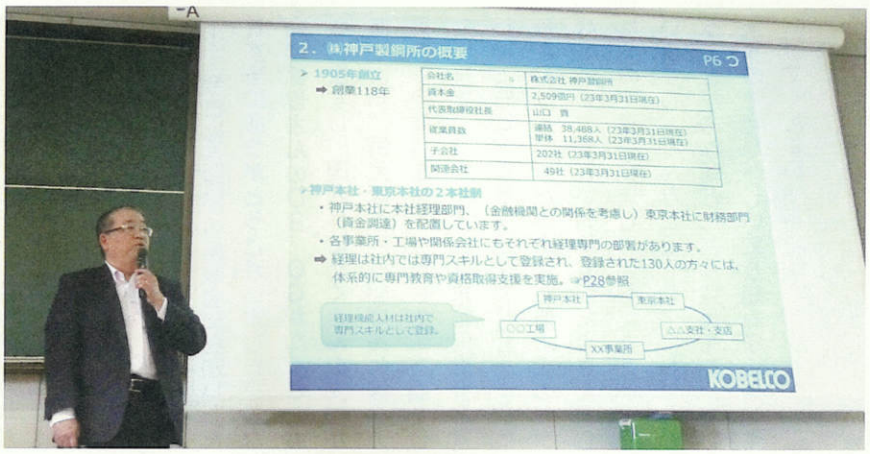
講義紹介：

2023年10月11日（水）13時から、㈱阪急阪神百貨店代表取締役社長の山口俊比古様が「2023年阪急阪神百貨店の経営戦略と実践」と題し、企業の歴史、経営戦略、今後の目指すべき方向性などについて在学生約200名に分かり易く講義されました。最後に、在学中に是非取り組んでいただきたいことを語られ、学生からは終了後も多数の質問があり、一人一人に丁寧に応えられていました。



受講生の感想紹介：

11月8日（水）13時から、㈱神戸製鋼所代表取締役副社長の勝川四志彦様が「会計専門職ってどんな仕事？　経営者視点の財務・経理の重要性」と題し、講義されました。受講生から、「神戸製鋼所の事業運営におけるPDCAの仕組み、ROICツリーなどの経営指標、M&Aにおけるデューデリジェンスの実施などをお聞きし、あらゆる事業活動において財務・経理部門が重要な役割を果たしていることが良く理解できました。今後はより会計の勉強に力を入れていきたいと思いました。」との感想がありました。



最後、この場をお借りして、講師を務められたすべての方に改めて心より感謝申し上げます。今後とも本学の教育にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

知の交流シンポジウム2023について

上瀬昭司
国際商経学部　准教授
（修H2・博H6）

兵庫県立大学「知の交流シンポジウム2023」が2023年9月22日に神戸商工会議所会館で開催された。3年以上にわたって世界中にパンデミックを引き起こした新型コロナウイルス感染症の広まりもようやく落ち着きを取り戻し、今年5月8日に感染症法上第2類から第5類に位置づけが変更された。これを受けて、今年度のシンポジウムでは、「ポストコロナ時代における新たな産学公連携によるイノベーションの創出」をテーマに、DX（デジタルトランスフォーメーション）やGX（グリーントランスフォーメーション）など時代の大きな変節点にある現状を見据えた今後の産学公の交流やそれを通じたイノベーションの創出を模索していった。

神戸地区での開催は2019年以来4年ぶりのことであり、神商ホールで開催されたシンポジウムには総計328人が参加した。午前中、畑豊実行委員長の開会のあいさつの後に、國井総一郎理事長、髙坂誠学長があいさつし、それに続き、一般公演では、友野哲彦国際商経学部長（博H6）、藤江哲也社会情報科学部長、工藤美子看護学部長、吉村美紀環境人間学部長兼環境人間学研究科長から各学部における取り組みが報告された。宮脇新也兵庫工業会会長のあいさつに続いて、川崎博也神戸商工会議所会頭・株式会社神戸製鋼所特別顧問から「変化・変革の時代に求められること」と題して特別講演があった。

13時55分から15時15分は、ポスター発表コアタイムとなった。国際商経学部からは、濱田洋准教授と和田真理子准教授が「プロジェクトゼミ」における活動の成果を報告した。

「プロジェクトゼミ」ポスター

15時15分からは神商ホールにて再び一般公演が行われ、藤沢浩訓工学部長兼工学研究科長、小林寿夫理学部長兼理学研究科長が報告した。

その後、中井亨日本新薬株式会社代表取締役社長（G45）から「DXの推進による新たな事業機会の創出について」、大西雅之株式会社日東代表取締役社長・ノアインドアステージ株式会社代表取締役（G37）から「事業の多角化で100年～製造業からサービス業への変遷～」と題して特別講演があった。

シンポジウム終了後、隣接するアリストンホテル神戸2階のバレンシアにて交流会が催された。國井理事長の開会のあいさつに続き、川崎会頭の乾杯のご発声で始まり、総計129名が交流会に参加した。盛況であった。

「兵庫県立大学の留学生を対象とした日本語スピーチコンテスト」開催について

首藤美香
国際商経学部　客員教員

2023年7月22日に、国際商経学部の企画として「兵庫県立大学の留学生を対象とした日本語スピーチコンテスト」が、初めて開催されました。

国際商経学部のグローバルビジネスコースは国際的な人材を養成する目標があり、授業も英語で行われています。しかし、日本で活躍するためには日本語・日本文化の基礎知識は欠かせません。初年

上位入賞者、参加者には賞品が渡された

度に留学生は必修の日本語の授業が週3コマあり、2年生からは選択授業となりますが、その他の授業が英語で行われているため、日本語に触れる機会がどうしても少ないという悩みがあります。そこでこの度、留学生の日本語学習の意欲向上と日頃の学習成果を発揮する場として、兵庫県立大学の留学生を対象としたスピーチコンテストを実施しました。

まず、スピーチコンテストの参加者はコンテストへの登録をし、その後原稿の提出、原稿の修正、原稿読みの練習、さらにはリハーサルを行いました。テーマは日本に関係することから自由に選ぶことができ、「日本の妖怪」や「杉原千畝」、「日本人の他人に対する呼び方」など多岐にわたりました。

スピーチコンテストの当日は13名の留学生がスピーチを披露しました。また、聴衆として多数の留学生も参加し、会場は大いに盛り上がりました。コンテスト参加者からは「来年はさらに日本語を上達させ、またチャレンジしたい。」「人の前で日本語を話すことに少し自信を持つことができた。」という声も多数あり、学生の日本語に対するモチベーションがさらに上がったのではないかと思われます。

上位入賞者の氏名及びタイトルは下記の通りです。

最優秀賞　Wang Tsai Yen
「日本に来てから日本についてどう思ったか」

1位　Nguyen Phuoc Hai Thanh
「日本とベトナムの架け橋になりたい夢」

2位　Muhammad Arief Maulana
「毎日少しずつ改善になる」

3位　Dam Thi Tu Chau
「日本の障害者について私の感想」

日頃は大学内で日本語を使う機会も少ない留学生たちですが、今後もこのように努力して培った日本語能力を発揮する場を提供していければと思っています。

コンテスト参加者

青春の邂逅

軟式庭球部・部誌「こぅとさいど」（レジェンドかも）

西山　隆（学部11回）

はじめに

私は昭和32年（1957年）に兵庫県立神戸商科大学に入学し、入学式即日軟式庭球部に入部致しました。在学4年間、学業は熱心とは言えず成績は普通でしたが、部活は熱心に励みテニスコートの出席率が抜群ということで？主将にも選ばれました。卒業後はテニスから縁遠くなりましたが、私達の時代に創刊した軟式庭球部の部誌「こぅとさいど」は、今でも毎年届けられています。学部6回大西敏夫氏（故人）他の先輩たちのご尽力で組織化されたOB・OG会「淡水軟式庭球クラブ」も継続して活動を続けています。この素晴らしい部誌もOB・OG会も、その礎となる時々の軟式庭球部の活動が連綿として継続してきたこそのものです。部誌「こぅとさいど」57号（平成29年？）に掲載された私の寄稿文を転載させていただくことで、在学当時の軟式庭球部の活動の様子や部活に係る私のことなどの片鱗を披露させて頂きます。

現役時代の筆者

寄稿文「レジェンドかも」

部誌「こぅとさいど」は、私達の時代の昭和35年5月1日付で創刊されました。この部誌の発行の目的は、創刊に尽力された主務の桃井麒一郎氏（故人）が創刊号に詳しく書かれています。それを要約しますと、先輩との絆や部員間のチームワークを強化すると共に部の記録を整然と残すことにありました。「こぅとさいど」発刊の裏話です。当時は部活費用に困窮しており、部員全員が手分けをして先輩たちの職場を回り寄付をお願いしていました。突然先輩を訪問して「寄付をお願いします」とはなかなか切り出し辛いものです。部員たちの悩みの種だったところ「部誌を作り、手みやげ名刺代わりに持って行こうよ」と誰かが提案し、部員達の総意を得て発刊に到ったのが真相だったと思います。それから57年経ち、部誌のタイトルが「こおとさいど」に変わったのと〔注1〕号数が1号少な